



OVERSEAS

Hashemite Kingdom of Jordan

—ヨルダン・ハシェミット王国—

海外事情【寄稿】



アラブの中のアンマン事情



西野 悟 NISHINO Satoshi

八千代エンジニアリング株式会社
国際事業本部 アンマン作業所長

2009年11月、ヨルダン・ハシェミット王国の首都アンマンにやってきました。冬、年越し、短い春と暑い夏、ラマダン、そして秋となり、やっと1年が過ぎましたので、アンマンの事情についてご紹介します。

ヨルダン王国の概要

ヨルダンはイラク、サウジアラビア、シリア、イスラエル、パレスチナ暫定自治区と接し、アカバ湾を挟んでエジプトと向いあっています。規模としては人口、面積とも北海道と同程度と考えてください。た



図1 ヨルダン王国の位置

だし、人口の7割はパレスチナ系住民(難民)と言われており、湾岸戦争以降、イラクから逃れてきた人も多くいます。

ムスリムがメインの国ですが、場所柄、キリスト教徒の観光客も多くみられます。主要輸出品は衣料品、リン鉱石、カリ、化学肥料、主要輸入品は原油、輸送機械です。

アンマン(標高約1,000m)

アンマンはもともと7つの丘の上に建設されたらしく、坂道が多いので、自転車はほとんど見かけません。現在の人口は約120万人で、なんと19の丘にまで広がっています。



写真1 丘に張り付いた住宅(下町)

気候は、平均気温が年間を通じて東京と同じ位です。冬には雪が降ることもあります。雪が降ると、スノータイヤがないこと、坂道が多いこと、路面が普段からテカテカということもあり、自動車が走れなくなるので、そうなる前に事務所を閉めて、皆、家に帰ってしまいます。ビックリ!

夏は、私にとっては十分暑いですが、乾燥しており、周辺諸国よりも涼しいので、中東地域の避暑地となっています。

生活、食事、お酒など

アンマンでの生活は思ったより快適です。私は、少々古いですがキッチン付のホテルに住んで、自炊しています。

・食事

羊肉のカバブ、鳥の丸焼きや大胆な野菜サラダ(そのまま丸ごと)などのアラブ料理が続くと、少々さっぱりしたものが食べたくなります。それならば自炊です。野菜、果物、米、肉など、なんでもスーパーで売っています。豚肉まで、あるところには売っているらしい。

学生時代以来の自炊生活です



写真2 下町の八百屋街



写真3 死海と泥を塗った人(not me)

が、休日のよい気晴らしになっています。肉じゃが、カレー、ロールキャベツ、餃子などレパートリーも着実に増えています。

・レストラン

アラブ料理からフランス、イタリア、スペイン、中国、韓国料理のレストランがあります。もちろん日本(風)レストランも。ただ、会計の時に10%のサービス料と16%の付加価値税が加わるので、思ったより高くなります。お酒も値段的には高いです。ビールは日本の居酒屋より高い。

・水と電気

雨はほとんど降らないうえ、人口急増、周辺農地での灌漑や水道管の老朽化(なんと50%が漏れているとか)などにより、アンマンでは上水が不足しています。首都アンマンでさえ、水道管に水が流れるのは週2日で、その間に屋上のタンクに水を貯めて、これで炊事、洗濯、お風呂、トイレ等に対処します。もちろん、飲んではいけません。

通常は夏場も涼しいので住宅にはクーラーはついていませんが、事務所にはあります。2010年は猛暑(何日か43度位になったそうです)に対応するため、4日位、昼間2~3時間の停電がありました。

・お酒等

ムスリムが中心の国ですが、街中には酒屋があり、ビール、ウイ

スキー、ワイン、ジンなど、日本酒以外は手に入ります。なんとヨルダン産のものまであるのです。レストランでもお酒を出してくれるところがあります。ただし、酔っぱらって外で騒いでいると、警察に引張られて行方不明になる可能性があるとのことです。注意してください。

私が大好きな、お姉ちゃんと一緒に歌えるようなカラオケ屋などは、もちろんありません。その他日本で言う風俗的なところも、私は知りません。

・その他

事務所には3名のヨルダン人の女性が働いています。ある時、何気なく夕食に誘ったら、すげなく断られました。落ち込んでいると、他の現地職員が「独身の女性が男性(他人)と食事に行くことは、我々のSocietyが許さないんだ。お前のことが嫌いなわけじゃないと思う」と慰めてくれました。そういうこともあるのかもしれない。

ラマダン

2010年のラマダンは、なんと真夏の8月11日から9月9日まででした。この間ムスリムの方々は、日の出から日の入りまで一切の飲食を絶ち、煙草も吸いません。そのかわり、日没後は親戚や友人達が集まって豪華な食事をし、その後、遊びに出かけます(若い人は朝まで)。

この期間中は、仕事の時間も短縮され、皆早く家に帰ります。レストランも昼は営業せず、夜のみの営業となります。事務所でも、日本人の方が気を使って、コーヒーなどを自分で淹れて、会議室など別室で隠れて飲んでいました。

酒屋もこの期間は営業をやめ、普段お酒を出してくれるレストランも、お酒の販売を中止します。ですから、多くの日本の方が、ラマダン前に酒屋でビール、ウイスキーの買いだめをしていらっしゃいました。こんな調子ですから、私が以前インドネシアにいた時は、日本の方はラマダン期間中に帰国される方が多かったのですが、アンマンの方々はではそうでもなさそうでした。

この期間、ムスリムの方々は、昼間少々いらいらされるのか、車の運転も荒く、路上でのけんかもよく見かけます。そのため注意が必要です。毎年、ラマダンの期間は10日間ずつ早まるようなので、こしばらくは、まだ、真夏のラマダンが続きます。

観光地

ヨルダンは位置的に、旧約聖書、新約聖書、ローマ、ムスリム、ペルシャや十字軍関係の遺跡や世界遺産が多くあります。アンマン市内にも結構規模の大きい遺跡が見られます。

・死海(標高-400m以下)

アンマンから自動車でも小1時間、ただひたすら道を下ります。水位は毎年低下しているようです。日本の海水浴場のように、自由には水際に近づけません。入場料を払って敷地に入ります。そこにはプールやシャワーもあります。そして、体に泥を塗って、浮きます。



写真4 ペトラの一風景



写真5 死海のそばの温泉(滝も温泉)

・ペトラ

死海からさらに南に80km行った山の中にあります。岩肌を掘って作った宮殿や石畳、岩を削って積み上げた柱など、造営だけで、とてつもない時間と労力がかけられていることが実感できます。

範囲はとても広くて、高低差があります。行きは岩肌を縫うように1時間近くも登り、帰りは20分位です。ロバの利用も可能です。とても1日では回りきれませんが、雄大な自然と昔の人達の技術力に思いをはせることができます。

とにかく日射しが強く眩しいですから、サングラスや日焼け止めはお忘れなく。

休日の過ごし方

ヨルダンの観光地はいろいろありますが、年2回の5連休や週末で十分回れるので、1年いると他にいくところがなくなりました。

私の普段の週末の過ごし方は、午前中死海で日光浴を兼ねて浮いて、その後、近くの温泉でマッサージを受けるというものです。

後は、殺風景な独り身の部屋を彩るため、市場のように道路沿いに集まっている花屋に行って、鉢植えを買ったり、季節ごとの花の育て方を教えてもらったりしていま

す。もちろん運転手さんに通訳を頼んでいます。そうそう、アンマンには1カ所、ゴルフ場があります。

安全対策

アンマンでは2005年11月の3件のホテル爆破事件以降、大きな事件は起きていません。いくつかは、当局が事前に摘発しているようです。しかし、国内の部族間の争いや周辺諸国のテロ活動の影響で、日本領事館から危険情報がメールで送られてきます。また、CNN、BBC、EURONEWS、FRANCE24、Al Jazeeraやヨルダンの英語ニュースなどで、常に情報収集には心がけています。もちろん、事務所の現地スタッフも重要な情報源です。

技術者の興味

主だった産業もないのに、どこからお金が回ってくるのか、今、ア

ンマンは建設ラッシュです。事務所のそばでは43階建てのTwin Towerが2011年春の完工を目指して工事中ですし、市内の至る所でショッピングモールやアパートメントの建設が進められています。

その基礎部分の根伐りでは、矢板等の土留工を使っていません。これも地盤が良い、雨が極端に少ない、地震がほとんど無いことなどによるものだと思いますが、怖い気もします。

今、基盤整備として、ヨルダン南部の砂漠の地下から化石水(海水などが地中に残存して地下水となったもの)をくみ上げ、アンマンまでの約320kmをパイプラインで送水するプロジェクトも工事が進められています。

その他、紅海と死海の高低差を利用した水力発電、この電力を利用した海水淡水化事業も検討さ



写真6 Twin Tower(工事中)



写真7 ビル工事の根伐りの状況

れているようです。

細かいことですが

・トイレ

もともとムスリムの人達は用を足した後、左手を濡らしてお尻を拭いていたそうです。また、下水管も古いので、日本と同じようにトイレットペーパーを使ってそのまま流すと、下水管が詰まってしまいます。

某国大使公邸でも、下水管が詰まるので、トイレットペーパーは流さないで、ごみ箱に入れるよう張り紙がしてありました。そのかわり、だいたい、便器にはシャワーがついていて、それでお尻を洗って、水を紙で拭きとってごみ箱に入れるようになっていました。ただ、冬の水は冷たいです。

・お金

アンマンではトラベラーズチェックを換金する銀行や両替屋が極端に少ないと思います。なぜか換金率も悪いです。また、日本円も両替しにくい。クレジットカードも、一流どころならいざ知らず(ほとんど知りませんが)、使えるところが少ないです。使えても、3%程度の手数料を取られたりします。大きいスーパーなどでは手数料は取らないようですが…。つまり、アンマンにいらっしゃる際は、米ドルまたはユーロをお持ちになるのが便利です。

・ヨルダン人も花火が大好き

アンマンに来て1週間が過ぎた頃。夜、お祈りの時間でもないのに、外から拡声器を通じて、アラビア語の変な大きな声が聞こえているなと思っていたら、急に「パン、パン、パン、ダ、ダ、ダ」という炸裂音。「アッチャー、テロかい?」。他の職員の安全を確保しなければと、部屋を飛び出し、フロントへ。フロントの兄ちゃんに「今の音は

なんなんだ? 危険はないか?」と英語(のつもり)で聞くのですが、なんと、彼は私の英語がわからないらしく、困り切った様子。その割には落ち着いているな、もしかしたらこんなことは日常茶飯事かと、益々心配になりました。こちらはあせって、「アウトサイド、パン、パン、ダ、ダ、ダ、ノーデンジャラス? ノープロブレム?」と鉄砲を撃つ真似をしながら、身振り手振りでやってみると、彼の眼に理解の色が見え、「ノー、ノー。ワイフ、ワイフ」とのたまう。「ワイフ?」ナイフならわかるが、ワイフとは何か。そこで、やっと鈍い私も閃いた。「もしかしてウディング・セレブレーションか?」。彼はにこにこしながら「オー、オー」とうなずく始末。

結婚式だけでなく、子供が大学の試験に受かった時など、アンマンでは親が、花火をあげてお祝いするそうです。念のため。

身分社会を思い知る

これも事務所を開いて間もない頃。トイレがやけに汚いので、掃除をするように、部屋の掃除やお茶を入れてくれる雑用係の男性に言ったところ、「トイレは汚いのが当たり前だ。掃除の仕方など知らない」と言われました。“郷に入るとは郷に従え”とは言いますが、さすがにこれには我慢できず、早々に洗剤、ブラシ、ゴム手袋を買ってこさせ、私が腕まくりをして、便器磨きを実践してしまいました。

彼曰く「お前は何でもできるな」と感心してくれ、「やっぱりクリーンはグッド」と英語で言うではないですか。それ以来、彼は納得してトイレ掃除をするようになり、私とトイレで会うと「クリーン、グッド?」と念を押してきます。お茶を入れるときは、必ず、前もって手をよく洗

えと改めて指示はしました。

また、事務所の女の子に「トイレの掃除の仕方を知らないのか?」と尋ねると、「それはメイドの仕事だから」と言われてしまいました。文化の違い、身分社会の有様を、こんなことから感じております。日本でも、トイレ掃除の仕方を知っている子は少なくなってきたのでしょうか。

結び

ヨルダンの方は、人がいいというか、郊外に出て話をしたりすると、初対面でも「家に寄ってご飯を食べていけ」と、しょっちゅう誘ってくれます。また、郊外では1km²の土地が約50万円で購入できるそうで、買ってオリーブ畑でもやろかな、などと思ってしまう。

しかし、市内のキングフセイン公園で、日本人会からの寄贈・植樹された桜の花を見ると、やはり日本に帰りたくなるものです。この木がいつか日ヨ関係のように大きく育ち、その下で日本人や世界各国の皆さんがお花見(お酒なし)している光景を思い描きながら、筆をおきます。

今新しい空港ターミナルビルが建設中です。皆さんがいらっしゃる頃には、完成しているかも。



写真8 キングフセイン公園の桜